

(別紙様式2)(A4用紙3枚以内)

学力向上フロンティアスクール取組事例

(都道府県：福島県)

発展的な学習や補充的な学習など個に応じた指導のための教材の開発  
個に応じた指導のための指導方法・指導体制の工夫改善  
児童生徒の学力の評価を生かした指導の改善

・学校名及び規模

古殿町立田口小学校									
	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特殊学級	計	教員数
学級数	1	1	1	1	1	1	1	7	14
児童数	26	26	23	20	32	19	1	146	

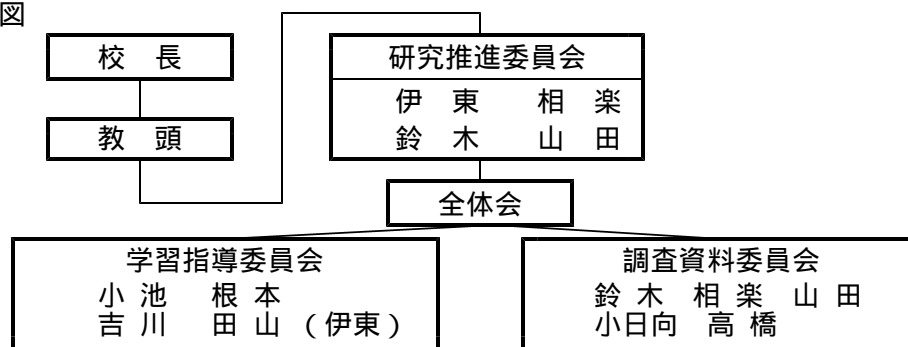
・実践研究の概要

- ・ 主題(テーマ)  
個に応じ、児童一人ひとりの確かな学力を高める算数科の学習  
～習熟度を考慮したコース別学習を通して～
- ・ テーマ設定の趣旨  
2002年4月より新学習指導要領が全面実施され、文部科学省は「学びのすすめ」で、確かな学力向上のために、習熟度別学習の必要性を説いている。  
本校の児童は、特に算数科の学習において、NRTで大きな個人差が見られる。また、一斉の学習では自ら進んで学習できない児童や、自分の能力を伸ばしきれず、アンダーアチーバーになっている児童がいる。  
アンケートをとったり、懇談してみたりした結果、次のようなことが明らかになった。「できた!分かった!楽しい!そして感動!」という成就感・達成感・満足感等を味わいながら進んで学習し、読み・書き・計算は勿論、考える力や伝える力等、生涯に渡り生きて働く学力を身に付けてほしい。

・実践研究の内容について

( ) 研究体制の工夫

組織図



## 運 営

- < 研究推進委員会 > 毎月1回定期的に開催する。  
研究の推進、共同研究の計画と立案、理論の研究・構築等  
先進校視察の伝達講習、資料の配付、文献の整理等  
指導案・授業実践の指導等 研究論文の「理論編」作成
- < 全体会 > 毎月数回の割で開催する。  
研究内容・方法の共通理解等  
指導案の検討・授業の反省と改善策・情報交換等

### ( ) 実践研究の内容

- 発展的な学習や補充的な学習など個に応じた指導のための教材の開発  
学習のつながりや広がりをも明確にした指導  
「あすなるタイム」での個に応じた学習プリントの活用や補充指導  
個に応じた指導のための指導方法・指導体制の工夫改善  
多様なコース別学習形態の導入  
算数の教材の研究や学習の仕方の指導の研究  
A Tの活用やT Tの導入  
教科担任制の導入  
児童生徒の学力の評価を生かした指導の改善  
アンケートやN R T、C R T等、事前・事後・把持テスト等の結果分析  
評価規準から評価基準を明確にして指導  
座席表の活用  
確かな学力に沿った自己評価

### ( ) 成果と課題

- 成 果
- 第5学年のN R T平均偏差値の推移をみると、研究の柱にした算数科において、今年度の上昇率（前年度比）が顕著である。

学年知能平均偏差値（平成13年度）：51.8

< 算 数 >

1年生時（平成10年度）	： 48.0	（前年度比）
2年生時（平成11年度）	： 49.7	+ 1.7
3年生時（平成12年度）	： 50.7	+ 1.0
4年生時（平成13年度）	： 52.5	+ 1.8
5年生時（平成14年度）	： 60.4	<u>+ 7.9</u>

- 次に挙げる成果により、児童一人ひとりの確かな学力が高まったと考える。
- (1) 指導方法・指導体制の工夫改善

多様なコース別学習の形態の導入をはじめ、その他各実践により、指導の個別化や学習の個性化が図られ、個に応じながら指導することができた。

算数の教材の研究や学習の仕方の指導の研究により、児童は問題解決的な学習の仕方を学び、主体的に学習を進められるようになってきた。

習熟度を考慮したコース別学習について研究していく時、ややもするとその学習形態のみの研究に偏ったり、ドリル学習やプリント学習ば

かりが先行したりする危険性をはらんでいるが、こういったことへの解決に向けても本実践は有効であった。

(2) 発展学習・補充学習等の教材の開発

学習のつながりや広がりをも明確にして指導したり、あすなるタイムで個に応じた学習プリントを活用したり、または、個別指導したりしたことで、児童一人ひとりが自分のペースで学習することができた。

(3) 評価を生かした指導の工夫改善

アンケートやNRT、CRT、事前・事後・把持テスト等の結果分析により、きめ細かに個の実態を把握することができると共に、児童の変容を把握しながら、個に応じた指導に努めることができた。

評価規準から評価基準を明確にして指導し、座席表を活用したことで、児童一人ひとりを具体的かつ明確に評価することができ、個に応じた指導につながった。

確かな学力に沿った自己評価は、児童が学習の成果を実感することにつながり、確かな学力を高めるのに有効であった。

課題

- ・ 児童一人ひとりの確かな学力を高めるにあたり、次の点が課題である。

(1) 指導方法・指導体制の工夫改善

多様なコース別学習形態を導入するにあたっては、どの単元でどの学習形態がより個に応じられ効果的なのかを明確にしていく必要がある。算数科における教材の研究や学習の仕方の指導の研究については、まだまだ個々の教師の力量に差があり、個への応じ方にも差があることが問題である。

(2) 発展学習・補充学習等の教材の開発

発展的な学習については、児童自らが内発的に考えを発展させる学習、つまり「算数のおもしろさ・奥深さに触れることができる発展的な学習」や「学級全体の学び合いにより考えを練り上げ、発展させる発展的な学習」等も含め、個への応じ方を広げていく必要がある。

(3) 評価を生かした指導の工夫改善

アンケートやNRT等の結果を日頃から生かすと共に、DRT、AAIも実施し、より多面的な個の実態把握に努める必要がある。評価規準から評価基準を明確にしての指導は、資料活用から自校化を図り、より個に応じた指導に努めていく必要がある。

( ) 成果の普及方策

研究公開(平成14年度:2回実施)

ホームページ開設

( ) その他

ソニー子ども科学教育プログラム実践校

県指定ボランティア推進協力校